

食支援つうしん

—新宿食支援研究会通信—
第29号 2017.5.1 発行

口には4つの役割があります。「呼吸をする」「食べる」「話す」「表情を作る」です。これらは生きていくうえで欠かせない機能です。また口は幸せを実感する器官ともいえます。

おいしい物を食べる。大自然の中で深呼吸する。親しい人と語り合ったり、歌ったり、笑ったり。誰もが幸せの場面を思い浮かべるときの風景ではないでしょうか。そして、目の前の人が笑っていれば、自然と自分も微笑む。大切な人との食事はいつもの何倍もおいしく感じる。子どもの穏やかな寝息を聞いて満ち足りた気持ちになる。「幸せ」を感じることは伝わっていくのです。

生まれてから死ぬまでの幸せの繋がりに、途切れることの無いように関わり続けていくことができるのが歯科衛生士という職業だと私は考えています。

「人生最期のときまで自分の口で食べたい」ということは誰もが望むことだと思います。たとえ最期の時期に食事が出来なくても、ほんのわずかなワンスプーンに幸せを感じ、穏やかな表情になることが出来れば、それは、幸せのバトンを繋いでいるといえるでしょう。

その方にとっての幸せのバトンを繋いでいくために、歯科衛生士として何が出来るか、日々考え続けていきたいと思っています。



(歯科衛生士 川野 麻子)

薬剤師・薬局の活用 ②

～薬剤師について～

薬剤師って何をしている人なのでしょう？ 普段、あまり関わりがない方は、薬局の中で、棚から薬を取っている姿を想像してしまうかも知れませんが、実際、どの職業においても、その職に就かないと深く理解することは難しいかも知れませんが、今回は「在宅療養に関わる薬剤師」にスポットを当てます。

薬剤師も医療人として、人々の健康を維持したり、病気や怪我の回復、心身の健康を促進するお手伝いをしています。どんな人でも幸せに暮らすことができるように、薬の専門家としての知識を活かして貢献したく、日々努力を重ねています。

薬には、病気を治したり、症状軽くしたりする目的とする働きをする「主作用」と、薬を使用したことで、目的から外れる好ましくない働きをする「副作用」(例えば、湿疹が出たり、眠くなったりするなど)があります。薬剤師は、薬の作用が、その人の生活にどんな影響を及ぼしているかに目を見張っています。もちろん、薬を飲む前から様々な情報を集めて予測されることにも注意しています。例えば、運動機能や排泄状況、睡眠状況、そして食事に関しても「生活」の問題として薬が悪い影響を及ぼしていないか継続的に見ています。しかし、薬剤師だけでは、その情報のほんの一部しか知ることができず、多職種からの情報が大変重要となっているのです。(薬剤師 齊藤 直裕)

タベマチフォーラム開催に向けて

新宿食支援研究会 代表 五島 朋幸

「最期までは、口から食べられない国、日本」いつからこのような国になってしまったのでしょうか。これではいけない。まずは新宿から「最期まで口から食べられる街、新宿」を作ろう！これが新宿食支援研究会立ち上げのきっかけです。

新宿食支援研究会を立ち上げる際、食支援の定義を調べてみましたが、そのようなものは存在しませんでした。逆に言うと、全国各地で多様な食支援が混在していました。そこで本会では、食支援を「本人・家族の口から食べたいという希望がある、もしくは身体的に栄養ケアの必要がある人に対して①適切な栄養摂取 ②経口摂取の維持 ③食を楽しむことを目的としてリスクマネジメントの視点を持ち、適切な支援を行っていくこと」と定義しました。食と栄養に問題のある方は少なくありません。新宿の高齢者だけ考えてみても1万人以上いると推測されます。このような食支援は当然専門職だけでは実践できません。一般市民の方たちも関心を持ち、多少の知識を持っていただくだけで「最期まで口から食べられる街」が出来上がるのです。そうです。街づくりこそ今求められていることなのです。

しかし、残念ながら他の地区の多くは専門職たちだけが集まり、「食べられない」という病気の方たちだけを対象に支援（治療）をしているのが実情です。これでは「最期まで口から食べられる国、日本」は作れません。そこで企画をしたのが「最期まで口から食べられる街づくりフォーラム全国大会（タベマチフォーラム）」です。

今回は日本の食文化を基盤に活動し、全国から注目を浴びている「京滋摂食嚥下を考える会」の荒金英樹代表をお招きします。「京滋摂食嚥下を考える会」は京都府下、滋賀県内で地域連携の推進をしているのと

同時に、介護食を地域の食文化へするべく各種プロジェクトを展開している全国でも注目を浴びている会です。

新宿とは異なる「口から食べられる街づくり」を学びます。「戦略の新宿」と「文化の京滋」。全く異なる2チームのすべてを吸収してください。そして自分たちの地域における街づくりに活かしてください。私たち全員の願いは「最期まで口から食べられる国、日本」なのです。

第1回 最期まで口から食べられる街づくりフォーラム全国大会

最期まで口から食べることを楽しむ街づくり

～見つける、つなぐ、結果を出す、そして広める～

食支援先進地域頂上対決！！

新宿 VS 京滋 (京都・滋賀)

【会場】 東京富士大学二上講堂
高田馬場駅早稲田口から徒歩5分

【会費】 3800円 (当日支払い5000円)

【定員】 500名

【主催】 新宿食支援研究会

【申し込み】 <http://shinshokukenn.org/>

2017年
9月3日
日曜日

フォーラム開催にあたって

私たち新宿食支援研究会は、食支援を「本人・家族の口から食べたいという希望がある、もしくは身体的に栄養ケアの必要がある人に対して①適切な栄養摂取 ②経口摂取の維持 ③食を楽しむことを目的としてリスクマネジメントの視点を持ち、適切な支援を行っていくこと」と定義しています。多種多様な人たちが対象であり、支援者でもあります。このような食支援は専門職だけでは実践できません。一般市民の方たちも巻き込んで初めて「最期まで口から食べられる街」が出来上がるのです。そうです。街づくりこそ今求められていることなのです。

今回は日本の食文化を基盤に活動し、全国から注目を浴びている「京滋摂食嚥下を考える会」の荒金英樹代表をお招きします。「京滋摂食嚥下を考える会」は京都府下、滋賀県内で地域連携の推進をしているのと、私たち全員の願いは「最期まで口から食べられる国、日本」なのです。

新宿食支援研究会 代表 五島 朋幸

プログラム

9:15 開場

10:00 開会挨拶

来賓挨拶 唐澤 隆 氏(内閣官房まち・ひと・しごと創生本部事務局 地方創生総括官)

10:20～11:50 基調講演

愛生会山科病院 消化器外科部長 荒金 英樹 先生

食支援による京の町づくり

【講師紹介】1992年度京都府立医科大学医学部卒業、京都府立医科大学第一外科、1993年厚生労働省研修科、1998年厚生労働省研修科「高齢者の食生活と文化の交流」、2000年厚生労働省研修科「高齢者の食生活と文化の交流」、2004年厚生労働省研修科「高齢者の食生活と文化の交流」。

13:20～13:50 新宿派「最期まで食べることを楽しむ街づくり」実践法

新宿食支援研究会の戦略「MINK&M」を全部公開します！

13:50～15:20 多職種フォーラム「最期まで口から食べるためにすべきこと」

口から食べるために必要な全身管理、口腔管理、食事姿勢、食形態、摂食嚥下機能についてプロフェッショナルが語ります。

15:40～16:30 パネルディスカッション

最期まで口から食べられることを“楽しむ”街づくりのために何をすべきなのか、パネリスト、参加者が一体となって考えよう！

ブース展示も
お楽しみ企画いっぱい！